

白駒池へやってきた。茨木を朝の7:00、吹田経由で吹田ICを8:00出発。スーパーマーケットで食料・酒類を調達、SAで昼食、それぞれ30分程度だが、やはりGWの初日、所々の車の渋滞、テント場に3:00到着ということで8時間もかかってしまった。テント設営に1時間、池の周りを散策している。去年は5月下旬、一昨年は同じGWの時期、澤山・衣川の3人でここに来ている。<ここで音声中断>氷を踏んで思い切りひっくり返ってしまった。レコーダーは氷の上にたたきつけられ、オレ自身仰向けに、しかも背中 of 辺りに丸太、まさか怪我はとヒヤリ、頑丈な身体ゆえになんとも無かった。帰ってから風呂にはいったときの痛みで、肘のあたりを少しすりむいた程度だった。「いてて」と苦笑いしながら、遊歩道のつるつる氷、長靴は滑りますねえ、怪我が無くてよかった。一昨年の話にもどるが、池の水は凍っていた。小屋のおっさんが田舟のようなもので、池の真ん中まで漕ぎだしなにかの作業をしていた。池の周りにはまだまだ雪が積もっていたのを思い出す。

今日は寒い、大阪では昼間、Tシャツ一枚で外が歩けた、陽ざしがきつく肌が痛い、徐々に肌が黒くなっていくのを感じている、なのにここは冬の気候、冬の下着、セーター、冬のジャンパー、手袋も要る、それでも寒い。地面には雪も少しは残っているが、雪が解け、それが凍り、厚氷がたくさん見られる。湿原の中、針葉樹の“立ち枯れ”なんの木かな、大台川原風の立ち枯れ、笹が生え、水が流れ、木道が続く、夕陽がきれい。シャクナゲがひよろり、青々の針葉樹、雪の白がまだら、動物の気配は無いねえ。

5人組でやって来た、夕方の今、標高2000Mを越える高地、野外の食卓、たくさん着こんでも冷えてくるといいながら、ビールで、酒で、焼酎で、皆さん飲むこともつわものである。「今日はどうんすき キュウリにセロリに レモンをカット 旨い」その後テントに入ると、うそのように暖かい。GWなのに小屋もテント場もさほど混みあっていない、トイレがきれいなのは感激。夕方になると水道は凍結。この水は池の水だそうで、山に持って行って飲むと、藻の臭みがする、湧き水ほど旨くはないが、かまわずぐいぐい。

朝5時起床。睡眠導入剤を飲んだ、酒もおおいに飲んだが、こいつを飲むと朝までぐっすり眠れる。一昨年来たときは、同じように酒を飲んで寝袋に入ったが寝つけなかった、朝までに4.5回トイレに行った、案の定翌日の山はしんどかった、山は寝不足が大敵だ。胃薬も飲んだ、こいつを一袋飲むと悪酔いが無い、あくる朝の軟便にも都合がいい、なんて格好よくいっているが、酒を飲むと下痢になる、下痢になると山ではあせる。

7:00出発。皆様にわがままをいい、単独行、今から天狗に向かう。一昨年は澤山さんと黒百合ヒュッテまで行った。寝不足で「まだかな」と愚痴がでるほど身体がだるかった、今年ではできれば天狗の手前で右に折れ、天狗の奥庭をめぐるって帰りたい、あそこの美しさに触れてみたいと秘かに思っていたが、4人の皆さん、車山か霧ヶ峰に行きたいといわれるので、その言葉に甘え単独行で天狗をめざした。テント場からすぐに皆さんと別れ進みだしたが、きれいに整備された遊歩道に凍っている、昨日の白駒池の周辺と同じように厚い氷になっている。これはいけないと引返し、アイゼンとサングラスを持ち出した。

ツルツルの氷の道を滑らないよう右へ左へ、高見石小屋に着いた。コースタイムと同じぐらいの時間着いた。小屋の下で、仲間からいただいた大福もちを食った。小屋の上に岩がある、その上に人が乗って向こうを見ている。思い出した、澤山さんとあそこに登って、景色を楽しんだ。中山峠に向かって出発。

峠の手前で小休止、ここは中山という。茅野市方面がまる見え、空は青いが向こう山は霞んでいる。さあどこまでいけるか、前方に天狗の姿が見えてきた、あのかい山、あの高みに登れるか、奥庭の美しさに触れられるか、雪が少し残っている、老人パワー、こなせるか、やや不安。

中山峠で休憩、昨日買った“信州アンズ牛乳パン”ちょっとでかいが食い始めるとなかなか旨い、アンズの香、牛乳の香、ほおばった。青い空に飛行機雲がぐいぐい伸びていく。向こうから若者「こんちわ～」北八ヶ岳は、若者が多い、はちきれそうなパワーでどンドン歩いていく、むかしはオレも人に負けないぐらいに早かった、とひとり言、彼らが眩しいねえ。最近の人たちは、両手ストックが多い。カラフルな靴、あれは憧れるねえ、ぐいぐい歩いていく。オレはピッケルをもつ、雪がなくても杖がわりに使う、雪に突き刺すと安定する。

天狗の手前、分岐までやってきた、ここまで登れた、相当疲れた。先ほどから同じようなピッチで歩く青年がオレと同じカメラを持ってパチパチやっている「申し訳ない オレのカメラで 写していただけますか」「このカメラ、古いレンズなので、ピントを合わせないといけません が あなたなら 大丈夫そうなので」なんて勝手なことをいい 3 枚写してもらった。天狗がよく見える、上に人が何人かいる、アイゼンはいらないが雪が残っている。左右の街、茅野方面、小海方面が見渡せる、白く見えるのはビニールハウスか、信州は果物の産地、リンゴ、ブドウ、ナシ、それから何があるのかな。下に見える小屋は“しらびそ小屋”かな“みどり池”が見えないが。

天狗の奥庭、もう少しで池、黒百合ヒュッテも眼下に見える。黒い石、黒い岩、大小、岩ゴロゴロの景色、黒と緑と白のバランスがいい、お気に入りの景色だ。火山の噴火弾なのか、溶岩の堆積なのか、地学の先生ならこんなゴロゴロがどうしてできたのか教えてもらえるが、建物ぐらいの大きな岩、車ぐらいの岩、様々な岩ゴロゴロ。腰を下ろしてレーズンパンを食べている、ちょうどいい気候、セーターと冬のジャンパーを着ているが、暑くもなく寒くもない、汗も出ない。出発から 6 時間がたった、いささか疲れてきた、注意をして帰らなければ、まだまだ岩ゴロゴロが続く。

疲れたので来た道を帰ろうと思いつつながら“にゅう”の看板を見ると誘い込まれた。崖が突き出たところで休憩。下の湿原へは昔の仲間と何度も来た、しらびそ小屋のテント場に泊まってここに遊びに来た、広々とした原っぱ、みんなほっとしてへたり込んだ。ひょっとしてここはものすごく大きな火口があったのでは、硫黄岳、天狗岳、にゅうが、何度も噴火、何度も崩壊、富士山のような大きい山が崩れてできた地形かな。「疲れた」スケッチデモしながらゆっくり帰ろう、4 時ころには帰りつくだらう。

今日は歩いた、歩けた、ペースはゆっくりだけれど、たっぷり山が満喫できた。オレにとって、山は、山のよさは、歩けるのがいい、足が動かせるのがいい、地面を見つめ歩くのがいい、岩がいい、土がいい、木がいい、空がいい、雲がいい、雪もいい。雨はいやだね、強風、吹雪もつらいね。寒すぎるのもいやだね。

やっと湿原、池に近い木道まで帰ってきた、10 時間行動になってしまった。こんなに長い時間の単独行動はいけない、事故のもと、反省である。木道が続く、水が流れ、その水が凍り、雪も残っている。笹やシャクナゲ。鹿の姿も声も聞かなかった。一日歩けば動物の声なり、匂いなり、糞なり、であうのだが今日はゼロだった。この辺りはコケの森として有名なのか、雨季でないのもまださほどは美しくないが、コケは多い。

無線機を持たされたが、連絡がこなかった。「山では 無線が 便利 携帯電話は通じない 無線なら どこでも いつでも だれとでも 連絡がつく」無線機のよさを教わったが、連絡がなかった。後から聞くと、何度も連絡をしたが通じなかったらしい。なにかの不具合だというが、これに関して無知なオレにはわからない。

帰る日の朝飯、昨夜のちげ鍋にアルファ一米をいれ、野菜、豚で煮込んだおじや、これが旨い。塩昆布、キューリ、セロリの漬物、食後のコーヒー、アウトドア一満喫。道中は運転手、眠気覚ましは、レタスの葉を座席に置きパリパリ、咀嚼と水気と繊維質が頭をすっきりさせる、眠気が襲ってこない。GWの渋滞、10 時間ほどかかってしまった。

天狗岳から帰って二泊、またまた山へやって来ました、今は京都市右京区にある麩村八丁。今回もテント泊。急登の1時間、次にだらだら下りの1時間、荷が重い、汗が流れる、信州に比べ温度が高い、Tシャツ一枚でも汗が流れる。天気予報で昨夜は大雨といていたが、たいした雨が降らなかったのか、川の増水もなく地面も乾いている。今は雲が多少あるが晴れている、暖かいとはいえ暑くはない、昨日の大阪・京都は真夏日の気温だったそうだ。荷を降ろして休憩していると風が冷たい。ここは京都市とはいえ、700Mの高地、涼しく、雨が多い。

新緑の季節、みどりが一番きれいな季節、田んぼには水が入り、今日明日にも稲の苗が植えられる。みどり青々、花が、芽が、葉が、顔をのぞかせる。先ほども「みかんの花が 白い花が 咲いて 咲いて いくら掃除をしても 下に落ちるので もう ほってます」というおばあさん。黒々の針葉樹もいささか若やいだみどり、広葉樹のみどりは、パレットの上で黄色とみどり色をパレットナイフで混ぜあわせた絶妙な色合いになっている。

テントをはり終え、辺りを見回すと、ピンク色の花「なんの花 しゃくなげ しゃくなげだ」じつはこの花は好きなんです。花が好きだとは大きい声でいいたくないが、山の中で、雨の中でこいつが咲いていると感激します。白とピンクが、まったり、あっさり、しかも華やかに薄暗い木々の間に、濃いみどりの中にこいつがあるとじつにいい。二年前、大峰奥駆道の最終日だったと記憶するが、今にも降りそうな薄暗いなかに白とピンクがちらほら「おお」と叫びながら歩いた、そんな土の上に腰を下ろして“めはりずし”のおにぎりをほおぼった思い出がある。

カジカガエル・シカ・テン・フクロウ、夜になると動物たちがうごめきだした。夜7時を回っているのに空が明るい、不思議なぐらいに明るい。ここは四方を山に囲まれた谷筋にある平地、四方の山の木々が黒々としているので、その反比例で空は明るいのか、不思議な現象だ。川のなかから笛を吹くような声はカジカガエルだ。テントのそばで2.3頭のシカの目が光る。猫のようなすばしこい小さな獣「あれは テンです」と翌日教わった。いつも山に行くと「ホ～ホ～」という声は聞いていた、「ハトかな」と思っていたが、今回始めて「あれは フクロウです」と教わった。きわめつけはマムシにも遭遇した。渡渉の多い山ということで登山靴ではなく長靴を履いてきた。足先から30CMのところには彼がとぐろを巻いているのを発見したが、長靴のおかげで驚かなかった、さほど怖くはなかった。冬眠明けなのか、棒で触ってもゆっくり向こうの方にニョロリ去っていった。

麩村八丁というロマンチックな名まえ、名の通りかってここには家が何軒かあった、二段三段の石垣が家の敷地を区切っている、文教所のようなものもあったらしい、山に入るといたるところに炭焼きの窯跡がある、窯跡は丸く石垣が積んであるだけ。地蔵さんも、いくつかの墓もある。そんな広場の真ん中にピラミッド型トタン葺の構造物、その小屋に“村長”と呼ばれている方が年の半分も常駐しておられる。毎年来るような常連の方々は、雨でも降ればその小屋で宴会をされるらしい。「もう 宴会が 三日も続いて」とうれしい悲鳴をあげておられた。「家より ここのほうが よろしいわ～」そのピラミッドのバラックの扉に赤・緑・黄の枠がある、現代美術風である。

草の上にマットを敷きビールを飲んでいる、あては、レタスと太い魚肉ソーセージ、このソーセージ、若いころは旨いと思って食っていたが、最近はずんと食指が動かなかった。それがこんなところで寝そべって食うと至極旨い。そばを流れる川に、10CMぐらいの魚が白い腹を見せてすばやく消える。トチノキがある、下の土に赤い海老の殻のようなものが落ちていて、トチノキの葉はまだみんな小さい。よくよく見ると赤い殻は、葉の芽を包んでいた袋、その袋がはじけて下に落ちたものが赤い海老の殻のようなもので、少しねばねばしている。葉はやっと何日か前にはじけ、大きくなろうとしている。トチノキの葉は、天狗の団扇のように天に向かって大きく広がっているものだと思っていたが、若い新緑はみんな垂れ下がっている。これはどういうことだか知らないが、不思議な現象。山の木々も新芽だと思っていたら、青い花だったり、青い葉だったり、知らない不思議なことがいっぱい。

方丈記を読んで：鴨長明のボヤキ節、名文のエッセイ集。ここに地震・雷・火事・オヤジ、が述べられているので紹介します。その前に、有名な方丈記の書き出しを味わってください。

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず、よどみに浮かぶうたかたは、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。

大地震：おびたたくおほなる（大地震）ふることはべり（侍）き。そのさま世の常ならず、山は崩れて河をうず（埋）み、海はかたぶ（傾）きて陸地をひたせり。土裂けて水湧き出で、巖割れて谷にまろび入る。
1185年7月9日：もう普通の地震でなく、山が崩れ河を埋め、津波で陸地が水に浸かり、地面が裂け水柱が立ち、岩が割れ谷に転がった。浜の船は波におもちゃにされ馬も足をふらつかせた。京の寺や堂は壊れたり倒れたり、その塵芥の立ち上る様は煙のようだった。地面が動き、雷鳴のような音、羽がないので空も飛べない、竜でもないのに雲にも乗れない、最も恐ろしいものは地震だと痛感した。地・水・火・風の四大種のなかで地だけはいつも動かないものと思っていたが、災いをなさないものと思っていたが・・・。

竜巻：治承四年卯月のころ、中御門京極のほどより、大きな辻風起こりて、六条わたりまで吹ける事侍りき。三四町を吹きまくるあいだに、こまれる家ども、大きなも、小さきも、ひとつとして破れざるはなし。さながら平に倒れたるもあり、桁柱ばかり残れるもあり、門を吹き放ちて四五町がほかに置き、また垣を吹きはらひて隣とひとつになせり。いわむや、家のうちの資材、数を尽くして空にあり。檜皮、噴板のたぐひ、冬の木の葉の風に乱れるがごとし。1180年初夏のこと、上京区辺りから大きな旋風が起こった。風や埃を煙のように吹きたて、目をあけていられない。めりめり大きな音をたて、家が壊れ飛ぶのだから人の声など聞き取れない。

大火事：予、ものの心を知れしより、よそじ（四十）あまりの春秋を送れるあいだに、世の不思議を見る事ややたびたびになりぬ。いにし（去）風はげ（烈）しく吹きて、静かならざりし夜、いぬ（戌）の時ばかり、都のつつみ（東南）より火いで（出）来て、いぬい（西北）に至る。はてには、朱雀門、大極殿、大学寮、民部省、などまで移りて、一夜のうちに塵灰となりなき。火元は樋口富の小路とかや。舞人を宿せる仮屋より出で来たりけるとなん。風に吹きちぎられ火がついたままのものが、一町二町空を飛んで燃え移る。ある者は煙にむせ倒れ、ある者は炎に目がくらみそのまま死んでしまう。家財道具、金銀珠玉の宝物もそっくり灰になってしまった。

山：また麓に一つの柴の庵あり、すなはち、この山守がをる所なり。かしこに小童あり。ときどき来たりてあひとぶらふ。もしつれづれなる時はこれを友として遊行す。かれは十歳、これは六十、この齡ことのほかなれど、心をなぐさむることこれ同じ。或はつばな（茅花：茅萱：イネ科の多年草：屋根を葺く）を抜き、いわなし（岩梨：こけもも）をとり、ぬかご（零余子）をもち、芹をつむ。或はすそわの田居にいたりて、落穂を拾ひて、積組を作る。もしうららかなれば、峰によちのぼりて、はるかにふるさとの空をのぞみ、木幡山、伏見の里、羽束師を見る。勝地は主なければ（地主が居ないので）、心をなぐさむるさはりなし。歩み煩ひなく、心遠くいたるときは、これより峰つづき、炭山を越え、笠取を過ぎて、或は岩間にまうで、或は石山ををがむ。もしまた粟津の原（木曾義仲最後の地）を分けつつ、蝉歌（平安歌人）の翁をとぶらひ、田上河をわたりて、猿丸太夫（平安歌人）の墓をたずぬ。春は桜、秋は紅葉、藤や木の実を拾って、仏前に供え土産にもする。月を仰いで旧友を思い、山にこだまする猿の声に涙する。

本の解説では鴨長明の時代、うちつづく戦乱の合間に天変地異が都を襲う。平家全盛時代から源頼朝の挙兵。辻風、飢饉、無数の死体があふれ、大地震で都は壊滅状態に陥る。

上原栄子著（1915～1990）＜辻の華-くるわのおんなたち-抄＞：“遊女”という本をパラパラ、何の気なしに＜辻の華＞を読みだし「えっ」と驚き、「すごい人にぶちあたった」といっきに読んだ。

本：沖縄の人々は唐・大和・米、幾度も世代わりを経験しそのたび支配者である三国の旦那様をもつ経験をさせられた。沖縄に生まれた私たちは、雑草のように、踏まれても、戦争に焼きだされても、なおたくましい生命力で生きのびてきました。那覇市の一角に、尚真王時代（1526）に始まったといわれる遊郭がありました。じつに400年もの長いあいだ、女の力のみで築かれた、世にもめずらしい花園でございました。「辻三千の美技」と色々な本にも書かれておりますが、特筆すべきは、やく300軒もあるといわれた妓楼のどこにも、女たちを支配する男性が一人もいなかった、まったくの女護ヶ島だった、ということです。その花園には実際に特別な女だけの行政がしかれ、売られてきた多くの女たちが、娼婦か芸者か見分けもつかぬ形で、厳しい辻だけの掟を守って秩序を保ちつつ、長いあいだに培かわれた穏健な雰囲気なかで、お互いを信頼し、尊重しあいながら日々の生活を営んでおりました。

オレ：無知で申し訳ないが、琉球とは何処のこと、調べると「おおよそ今の沖縄県と奄美群島も含まれる」と書いてある。九州より南に行ったことがない、あのきれいな海、南国の自然は憧れるが、ジェット機が飛び交うさまを見せ付けられると考えるてしまう。小林照幸著＜毒蛇＞ハブの血清、海人（うみんちゅう）を思い出す。

本：わたくしは四歳のとき“辻”という沖縄の遊郭に売られ、そこで育ちました。昔と申しまして50、60年前のことですが、今のめぐまれた生活に比べ、あの頃は、貧しい者たちが肩を寄せ合い、人間性を重んじ、お互いの恩に暖かく報いようとする、人間味豊かな暮らしをしておりました。しかし、一般に着るものにさえ階級があり、多くの貧しい人々は米の飯も満足に食べられないような暮らしをしておりましたので、けっして楽しい思い出だけというわけではありません。

オレ：この方は、オレのオヤジと同世代の人、彼女は太平洋戦争が終わった当時に30歳ぐらい。大阪しか知らないオレにとって、オヤジが育った山口、九州、彼女が育った琉球などの50年前100年前の様子は想像もつかない。「半世紀前までの日本人は 餓えていた」と語っていた講演者を思い出す。オレが子どものころを思い出せば極貧の人がいた、ボロ小屋の板の間に生活用具が散らばっていた、そこに暮らす友と遊んでいた。

本：わたくしの過去の思い出のなかにさまざまな男がおりました、初恋の男、わが持てるいっさいのものを捨てて肉体におぼれた男、好きでも嫌いでもなく金でわが身を売りつけた男、そして最後に激しい愛情を寄せたのでもなく、なんとなくなくなるようになって自然に持った夫・・・。「今お前の生涯で一番好きな男」といわれたら・・・。

オレ：俗にいう“苦界”で生きたこの方が「幸せであった」「楽しかった」「仲間の人たち 男の人 その嫁さん 世間に対して 恩に報い 誠意をつくし 義理を欠かさない」という言葉が何度もでてくる。「今お前の生涯で一番好きな男」といわれたら・・・。という問いに対して、「淡々と平凡に 欲も得もなく そんな夫」と答えている。

本：琉球時代、年にいくどか、貧しい人々も肉が食べられる日“シワキー”があったが、貧しいものはそんな日さえ、親指ほどの芋と、みそ汁に豚の油を浮かせるようなものでした。家族に病人などがで、最も手っ取り早い金策は、わが子を売ることでした。男の子なら“イチマンウイ”といって、糸満の漁夫として売られていった。糸満では、買い取った男の子を幼いときから海に連れて行き、潜り漁夫として訓練していたそうです。また女の子なら“ジュリ”（尾類）の卵として辻に売られていき、そこで芸娼妓として暮らすよりほか、親子の生きるすべはなかったようです。「済まぬ」とわびる親も泣き、売られていく子も泣き、たった一つの生きる道が身売りだったのです。

山岸恒雄著<セザンヌと鉄斎・同質の感動とその由縁>友人のI君「この本 会社の同僚が定年後 美術大学に入り したための論文」と渡された。この先生は大企業の経済畑を定年まで勤められた。本を読み終わって「よくも 調べられた 考えられた」と賞賛、会社員の若いころも、絵画のこと、画家のことは調べておられたのだろう。

両画家の作品には同質性がある「鉄斎は日本のセザンヌだ」と語っているタウト（ドイツ人の建築家）の言葉から出された。タウトは“桂離宮”の素晴らしさを日本人に再認識させてくれた人。本は 1) 両画家はお互いを知っていたか、認識していたか、答えは否。 2) セザンヌのことは、彼の手紙 236 通とその返事 98 通を基礎資料に。 3) 鉄斎は絵に書かれた文字、画賛を基礎資料に。ほとんどが中国古典の引用だが、鉄斎自身の言葉もある。 4) 両画家の絵を見てまわり、その模写もされた。ご本人も絵を描いておられる。

両画家の人物像を対比表に並べる。生存時期・生存地域・健康・気質・教育・読書・旅行・自然との接触・人間との接触・故郷との関係・家族関係と生業・酒・政治的立場・宗教・敬愛する作家と思想家・伝統に対する考え方・東西への関心・絵の種類・絵に対する考え・絵と思想との関係・絵と自然との関係・絵画論・尊敬する画家・当代画家との関係・画壇との関係 25 項目。人物対比表を概観すれば、当然のことであるが、まったく異なる個性が、別々の世界で活動する姿が現れている。

<読書> 鉄斎は破格の読書家で、読書によって俗塵を掃い自らの自然を養おうとした。

<旅行> 鉄斎は「万里の路」を行く大旅行家で、絵画制作における自然との接触方法の差が現れている。

<絵と文学・思想の関係>

◎セザンヌは「文学者が抽象的な思想によって自己表現をおこなうのに対し、画家はデッサンと色彩によってその感覚を、その知覚を具体化する」自然に対する絶対服従を唱え、自然の前で一切を忘れることを求め、自然によって目がしつけられることを望む。そのようにして見えてくる自然を、キャンバスの上に定着させ、実在化させる。

◎鉄斎にとって人間は自然の一部であり、自然と一体の自己を見出すという考え方は、東洋の伝統のなかにあって当然のことであり、いわば前提である。東洋の伝統の諸処の思想も、その道筋を幾通りも示し、また医する手段ともなって、彼の実践を援護してくれるものと考えていたのであろう。

<風景画の描き方>

◎セザンヌ 戸外の外光のもとで描き、鉄斎は、画室に座して描く。自然に接して沸き起こる感興を、そのままキャンバスに実在化させるセザンヌと、成熟を待った後に画面上に組織する鉄斎との違い。自然がそのもろもろの要素とともに震えながら持続するさまを、あらゆる変化を示すその外観を描きださなければならない。芸術はわたしたちに、自然の永遠性を味わわせなくてはなりません。自然の外観の下に何があるのでしょうか、何もないかもしれない。すべてがあるかもしれない。すべてです。・あらゆる部分で、その調子、色彩ニュアンスを定着させ、近づいていく、それから色と線をうみだす。・対称になる岩や木、それらはボリュームを備え、バルール（色価）を持っている。ボリュームとバルールが、わたしのキャンバスの上、わたしの感受性の中、目の前にある色面（本には面のみ）や色班と一致すれば、そのキャンバスは真実で濃密で充実したものになるのです。

◎鉄斎 万里の旅をして自然を熟覧することは、自然と自分の内奥が響きあって得られる。その感覚と感動を胸中に蓄積させ、しぜんの内奥でもあり自分の内奥でもある、いわゆる胸中の丘壑（きゅうがく-隠者の棲むところ）を醸成することにつながっている。鉄斎が筆をとるときにはすでに胸中に構想が出来上がっており、それを一気に呵成に画面上に組織したといわれる。

<伝統に対する考え方>

◎セザンヌ 人間は過去に取って代わるものではなく、ただ過去に対して鎖の輪の新たなひとつを加えるのである。ルーベンスとドラクロワを尊崇していた。自分の仕事を「プッサンを自然に即してやり直す」と位置づけていた。

◎鉄斎 王原昶の言葉を引いて、絵画の基本道は、古法を墨守するだけでもいけないし、わが手腕の熟達を求める

だけでもいけない。しかしまた古法の研究と、わが手腕の外にあるものでもない。鉄斎は夥しい数の模写をしている。原画は和漢を問わず山水、人物、花鳥、風俗、仏画。様式では大和絵、文人画、狩野派、写生派、琳派・・・。
 <気質>二人の偉大な画家の共通点は気質という言葉で表すことができるだろう。それは、つよく継続する力を本源的に有する気質である。そしてその力は、自然と結びついて駆動するのである。「セザンヌは自らの腹(ventre)にある気質(temperment テンペラマン)を常に意識しており、その原初的な力が画家をして完成に至らしめる」と信じていた。鉄斎の原初的な力はセザンヌの言葉を借りてタンペラマンと呼ぶならば「富士山図」はまさに鉄斎のタンペラマンを示しているように思われる。

セザンヌ：アトリエで製作された絵はすべて、戸外で描かれたものに匹敵できない。以後は外光の下で描く。

◎円筒・球・円錐理論：自然を円筒、球、円錐として、全てを遠近法の中に置いて扱いなさい。物体や面の各側面が一つの中心点に向かうようにするのです。水平線に平行な線は広がり、すなわち自然の一断面を与えます。この水平線に垂直な線は奥行きを与えます。自然というものは我々人間にとって、表面にある以上に奥行きがあるのです。そこから、大気を感じさせるために赤と黄で表される光のふるえに、かなりの量の寒色を加えてやる必要があるので。

鉄斎が神道的な人物であるとするならば下記のような思考と体質を持っていたと考えるべきであろう。まず鉄斎の血肉となっているのが神道であり、儒教・仏教、老・荘をも受け入れている。「私の絵を見るなら、まず賛を読め」「私は画家ではない、儒学者だ、絵は遊戯だ」

◎アーネストサトー：日本の神道は、自然宗教であり原始宗教であった。中国からの渡来思想に基づくものではなく、日本独自の信仰であった。農耕施設を構築した祖先に対する限りない尊崇、太陽の無限な力によって成り立つ農業の原点である自然への崇拝、このふたつの信仰によって古代日本人の宗教心が生まれ、やがて善悪の意識、道徳や戒律、罪の意識などの主観的な宗教的側面が表れる。

◎本居宣長「古事記伝」神道の解明。すべてのカミとは、古のみふどもに見えたる天地の諸々の神たちを始めて、それを祀れる社にまず御霊(みたま)を申し、また人はさらにもいわず、鳥獸木草のたぐい海山など、そのほか何にまれ、世の常ならずすぐれたることのありて、かしこきものをカミというなり。

山岸恒雄先生が富士山図を鑑賞したときの感想文。

美術館正面奥に、一双のおおきな屏風が立てかけてあった。今まで見たことがない富士山である。どのような絵もどのような写真も、富士山はこのようでない。まず、右隻の富士、巨大な竜が息を吐いており、聳え立つ山肌がその線だけで表されている。この線に集合が、それを引いた人の、無垢で強い心持が、引いたときに味わうであろう爽快感と充実感がともにこちらに伝わってくる。・・左隻の富士山頂の全図は右の富士山の頂上付近の拡大図である。この造形的な衝動、ぐりぐり盛り上がり、これが雄々しさというものなのか、赤みがかった空と緑の山肌が映えて素晴らしい景色である。ここにも人がいる、石にはいつくばり蟻のように働いている。この絵のダイナリズムは、胸がすくようである。この言葉で言い表せない感覚は何か。縄文式土器を見たとき感じたものと同じである。いわゆる火焰土器と呼ばれるものであるが、現代人が束になっても造型には適わないのではないかと思った。その肉薄するものがここにある。この実在感、量感、ものの立体的な表れ方はすごいことである。左右あわせてこの作品は、全肯定を表しているようである。この世の、あの世の、自然の、人生の、生命の、宇宙の、全肯定である。この絵に否定的なものは微塵もない。飾りも一切ない。私はこの絵を前にしたとき、腹のそこからこみ上げてくるものがあって、わけもわからず大笑いしたのであるが、これはこの感覚であったのだと後から考えた。これほどまでに肯定した作品を見たことがない。生命の全肯定のなかには、ユーモアに似た感情が少し交わってくるのかもしれない。「雄々しい強健な感情が題材を遍照して感傷的な気味は微塵もない」とはタウトの賛辞であるがこの絵の相応しい言葉である。鉄斎の気質には生命的、肯定的色合いがあり、それが作品全般に現れていることをきづかされた。

京都市内をうろうろしてきた。久しぶりの京都、紅からのメール「四条河原町中央改札 11:30 お昼を食べましょう」とのいうことで出かけたが、1時間ぐらいかかるだろうと茨木駅のホームに立てば、たちまち電車がやってきた。京都河原町行快速急行と書いてある。それに乗ると30分も早く待ち合わせ場所についてしまった。ちょうどベンチがあるので、左右を見回しつつ人を眺めているだけで時間が経ってしまった。

「まず 高島屋に行こう Yさんの陶器を 見に行こう」今日の目的はたまたま重なった展覧会3か所を二人でめぐる“うろうろ”である。6階の美術画廊に行くとそれらしきものが飾ってあるが、そこにいた係の人が「もう1階上の会場です」と教えてくれた。後から考えると7階は大きいスペースにたくさんの人たちの出品、美術館の公募展に似た雰囲気、しかも500円の有料。下の階の画廊は、上の大きな展覧会の幹部連中の作品だった。日本伝統工芸展、陶・ガラス・木・竹・金属・布・人形と並んでいる、普段あまり見ることのない伝統的な作品「なるほど 幹部連中の作品は いい」と思いつつ、大きな会場の作品群、若手のものは力強さがある。Yさんの陶器「火焰を利用した 窯の中で 窯の中のその場所で 色を出した 貝を使った」Yさんの説明、その大きな壺、楽しげだ。

「モロッコ料理とオムライスのどちらがいい」食ったことのないモロッコを選んだ。モロッコは、正式には“モロッコ王国”という「そうだ ジブラルタル海峡を 渡って行こう としたこともあった」地下の店についた。席が空いていた。定番の定食をひとつずつとビールを頼んだ。ハラリ：断食明けに飲むスープ、濃厚な味だけれど、どこかで味わったことがあると思わせる慣れた味、腹が減っているので旨い。ホブス：外見は中華まんじゅう、味も中華まんじゅうの生地の味、この雰囲気なら旨いが、パンとしては旨くはない。ビーフカツタ・タジン：ごった煮シチュウ、盛りだくさんの野菜、豆、牛肉、スパイスが効いて旨い、オレがよく作る豚とトマトと野菜いっぱいを蒸し焼きにする鍋料理、あれにモロッコ香辛料を入れれば同じようなものができるかな。オレのはポン酢で食うが、香辛料がたくさん入っているのでこのままで旨い。チキンクスクス：これは有名な蒸し焼き鍋料理。味はタジンと似ている、入っているものが違う、世界一小さいパスタがたくさん入っている。腹いっぱいになった。二人で4500円。

0さんの展覧会場は蹴上に近い。「歩けば 30分はかかるよ」「腹ごなしに 歩こう」まだ5月とはいえ晴れの昼間、暑い。ここも本人がいたが、客も多かった。3人展会場は狭い空間、0さん大きな作品が1点、ミニが数点。オレと同年代の彼女、40歳代ぐらいからの知り合い、若いころは京都美大の優等生だったかな。どんどん作品が抽象化してきているが、昔の香りもふんぷん。あとの二人は案内状の写真を見て楽しみにしていたが、がっかり、低すぎた。

次の会場は、Iさんの彫刻展、京都関係の人たちの名前がたくさん書いてあるが、知った名前は一つもない。「これも遠いよ」オレは、15分ほど西に行ったところと思っていたが、御所のそば、地下鉄、バス、と考えながらふらふら歩いてしまった「さすがにしんどい 会場についたら 休憩しよう」と言いつつ中にはいると、たくさんの人、休憩するようなどころもない、なんと本人までいる「やあ 娘ときた」さほど大きくない会場に、たくさん作品がずらり並んでいる。学生、学生上がり、先生の作品もあるようで、京都関係者をたくさん押し込んだ会場、「もう少し 落ち着いた会場で じっくりした展覧会を・・・」とおせっかいを焼きたくなるような雑然とした並び方。大きな美術館の、企画の展覧会を見慣れると、こうも雑然と並べられると「市の展覧会じゃ あるまいし」とぼやきたくもなる。Iさんの作品は我が家の階段のところにもう40年近く鎮座ましている。彼も若いころは京都美大の優等生だったと思われる、その当時の、鎮座の作品は大いに気に入っている、なかなかいい。今日のは、実物大裸婦立像のへそから下、白い金属調に仕上げた。仕事は丁寧で上手いけれど「なんで今頃 裸婦作品を 我が家の鎮座との乖離が 大きすぎる」とオレなりにやや不満。「オレが 油で 裸婦でも描けば もう描かないけれど 釣り合うのかな」

大いに疲れた「ビールでも」と二人で焼き鳥屋、4500円。紅とは烏丸駅で別れた。

15年ぐらい前の文章、献血のことでぼやいていた。：毎年、年末の今頃の季節になると、アカジュウジカンパニー（日本赤十字と素直に言えばいいのに・・・）から葉書が届きます。今頃の季節、輸血用の血液が不足するそうで、私のような献血常連者（安全な血液と自負）に「ぼちぼち献血してください」と請求の葉書です。「この歳になって、まだ使えるのか、いいかいな」思うのですが、前日はアルコールを控え、自転車で近所の献血センターに行きました。献血をしたことのない人のために説明します。献血には“成分献血”と“400ML献血”の二種類があります。成分献血は、1時間足らずかかります。血液の成分の一部を抽出して、残りは本人の身体に戻すので、身体にやさしい。一方、400ML献血は、昔からある献血で、10分ぐらいで400MLを抜きます。オレは1時間も時間がかかるのがいやなので、いつも400ML献血です。去年献血をしたその晩、犬の散歩をしていて、ふらっとし、体調が元に戻るのに二日ほどかかりました。「今年は200MLでいいですか」とお願いしました。看護婦さんが「200MLも400MLもいっしょですよ16歳体重が40キロから400MLですあなたが去年ふらっと来たのは体調が悪かったからでしょう大丈夫ですよ」とぬかされました。いずれにしても今年は200ML献血をして、1日経った今、体調も普段どおりで、酒も旨く呑んでいます。献血は60歳を超えても出来るそうですが、輸血される人の立場で考えたら、60歳のおっさんの血より、20歳代30歳代の若い人の血のほうが身体に力がみなぎってくるのではないだろうか考えると、遠慮したほうがいいかなとも思いますが、アカジュウジカンパニーからの請求葉書が来ますと、私もまんざらでもないかなと、献血に行ってしまう。出来たら来年も行きたいと思うのですが、いかがでしょうかね。

最高年齢は70歳までなので、今年はどうしましょう。15年前の比べ、ますます老翁になっている。「ジイサンなにしにきた」といわれる目で見られるのもしゃくだ。不健康生活のジジババに輸血されるのかと思うと、もっとしゃくだ。献血は50歳代から年一回ぐらいのペースで始めて20回を超えたか超えないかという回数。ほとんどは阪急茨木駅ビルにある献血センターに自転車で乗り付けた。受付の方に「400」というと、受付用紙が渡される。そこにはオレ自身の個人情報を書いてあり、毎回のように「病気はないか」「薬を飲んでいないか」「同性交情がないか」などの質問書があり、それをパスすると医者との問診と血圧測定。2.3年前にいた老翁医者が「いいですね そのお歳で まだ献血ができるなんて素晴らしい」なんてことをおっしゃった。それを聞き、場にそぐわない年配者のオレという自負が少しは和らぎ、うれしく思った。オレはいつも、献血センターの門をくぐるときにはいつも「オレのような年配者でも いいのかね」という気持ちになった、気持ちがしぼんだ。

10年前のこの文章に、献血のあと「1日経った今 体調も普段どおりです 酒も旨く呑んでいます」と書いてある。そういえば、毎日よく飲みましたねえ。これを書いた時から15年以上経った現在は量も減り当時のように毎晩飲んでいない。晩飯が終わると、犬の散歩、風呂に入る、というような雑用を済ませ、アトリエで昼の続きの絵を描きだす。アトリエで絵を描きながら「ぼちぼちいいかな」なんて勝手な理屈をつけ、階下で一杯の酒、冷蔵庫から食事のあまり物のおかずを皿に盛り、それらをお盆にのせてアトリエまで運んだ。「乾杯」小さい声で天井に向かって杯をささげ、静かにひとくち口に含む。「旨い」本当に旨いと思いながら飲んだ。「君は旨そうに 酒を飲むね」とよく言われたが、心底「旨い」と思った。1杯2杯と重ね頭の芯までぼ～っとして、布団に転がり込んで寝ていた。旨い順と聞かれたら、日本酒、ブランデー、ビール、ウイスキーと並べるだろうか。日本酒もある時期から“地酒”と呼ばれるものが流行りだした。それまでは大手の誰もが名前を知っている銘柄の、二級酒、一級酒、というような類ばかりを飲んでた。これは新潟の、これは石川の、これは広島、これは秋田の、というように、銘柄の名前は聞いたことがあるが飲んだことのない酒たちが自分の杯に入り始めた。それらの酒は「フルーティ 爽やか まろやか」といわれたくさんの人が声援を送っていたが「確かに 旨い」「でも 昨日まで飲んでた 酒も 旨い」と思っていた。最近、大手の安物の酒「米と米麴だけ」の鉄則を守って飲んでいる。ここ何日か、ちよくちよく飲んでいる。「飲む方が 体調が いいのでは」「以前 よく気にしていた ちょい ふらふら する」がなくなった。若いころは吉谷君、この10年はキヌさん、酒好きの人たち、おにいさん方、おねえさん方が、いつもオレのまわりをいらっしやる。